
愛してなんてあげない

祐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛してなんてあげない

【Nコード】

N7665Z

【作者名】

祐月

【あらすじ】

とある人の最期の時間の話です。

残酷描写はありませんが、死を連想させる内容のため、気分を害する恐れがありますので、お好みでない方はご遠慮ください。

前から考えていた内容を掌編として形にしてみました。

(前書き)

頭に浮かんでいた内容を形にしてみました。
死を連想させる表現がありますので、苦手な方はご遠慮ください。

彼と出会ってからもう7年。

失恋して、落ち込んでいた時に出会い優しかった彼。

気づいたら一途に好意を示してくれる彼に次第に心を寄せて行っ
た。

でも、すれ違い、一緒にいられなかった。

あの日もこんな寒い日だった。

「あのね。

赤ちゃんができたの。」

ここ数日どう伝えようかと思っていたことを伝えた私は不安でい
っぱいで、彼の反応を伺っていた。

重い沈黙の後、彼が口を開いた。

「子どもは待てないかな？

君はまだ仕事を始めたばかりだし・・・」

言いにくそうに、だが、ありそうな言葉に心が冷えて行くのを感じ
る。

うつむいたまま、何も言わない私に彼はまだ若すぎるし、家族を
養う力がないとか、一般的な意見を言い募る。

「わかった。

私、帰るわ。」

冷えた心で彼にそう告げ、ソファから立ち上がり彼の部屋を後に
する。

その背中を追いかける様に、病院には一緒に行くと聞こえたけど、
私は応えることなく彼の部屋を後にした。

涙を我慢して家路を急ぐ。

「やっぱりだめなのね。。。」

私、男運ないね。

今度こそ大丈夫だと思っただけ。。。」

自重気味にひとり言を言いながら歩き、気づいたら駅だった。

彼は追いかけてはくれない。

彼は私はもちろん、この子を望んではくれない。

自分の部屋に帰った私は一晩泣いて、翌日早速荷造りをした。

彼の知っているこの部屋を引き払うために。

その後、私は仕事を辞め、引っ越した。

彼とはそれから一度も会っていない。

そして今日、なぜか彼は死の淵にいる私の病室にいる。

「どなた？」

どうしてここにいるの？」

誰なのかは痛いほど知っている。

でも、誰なのか認めたらこれまでの時間がダメになってしまうそう思い、とつさに知らない人のふりをした。

彼は寂しそうにあの頃より年を重ねた落ち着いた表情で枕元の椅子に座っている。

「やっとみつけたんだ。」

泣きそうに顔を歪めた彼に、期待してはだめだと自分に言い聞かせる。

もう時間の無い私はあの日の事は忘れた様に振る舞わなければいけない。

「やっと、君をみつけたんだ。」

君が僕の目の前からいなくなつて、連絡もつかなくて、ずっと探していたんだ。

謝りたかったから。」

私は彼の言葉を聞かない振りをしてながら、耳を傾ける。

「子どものことで驚いて、君のことを考えられなくて、なんで子どもを待つ様に言ったんだろう？」

君のことを失いたくなんてなかったのに。。。」

彼はあの日、黙って彼の元を去った私に懺悔している。

私を失いたくはなかったと。。。

でも、あの日、壊れた私の心は戻らない。

もう信頼出来る人はいないと。。。

彼へと繋がる友人全てと連絡を絶ち、一人で知らない街へと引越した。

それに、もう遅いの。

私にはもう時間が無いから。

黙ったままの私の手を取り、体を寄せ、自分の額に私の手を当てる。

「愛しているんだ。

君をこのまま失いたくはない。」

今更言われても、信じることなんてできない。

それに、私に明日は来ないかもしれない。。。

「信じられないわ。

人のことなんて信じられない。

私は私だから。」

「愛しているんだ。

俺のそばにいてくれ。

できれば愛して欲しい。」

なんてわがままなんだろう？

信じられないって言ったのに、もう終わったことなのに。。。

「愛してなんてあげない。

だって。。。」

彼がそばにいた間にもだんだんと意識が重くなり、もうちょっと
と思っけれどもう時間切れみたい。

だんだんと彼のぬくもりも、力強く握られている手も感じられな
い。

最期の時にそばにいたのがあなただなんて、なんて皮肉なんだろ
う？

重くなる意識の中で口に出してしまったのかはわからない言葉の続
き、永遠に言わないつもりだったこと。

だって、こんなにまだ愛してるんだから、これ以上愛して
なんてあげない。。。

(後書き)

習作のため内容はぼんやりしています。

続けようかこれで終わりにしようか。。。

イメージが伝わるかわからないですが、伝わっていたらいいな

上手く表現できるようにしたいなと思って書いてみたものです。

一応、別視点からの話も考えているので後日あげるつもりですのでよろしければまたチェックしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7665z/>

愛してなんてあげない

2011年12月25日00時48分発行